

夢の実現に必要なもの

「自分の夢に向かって知識を得、なりたい仕事に就く」と考える人は多い。しかし、この考えを実現できる者はほんの僅かだろう。その原因は様々であるが、性別や人種などの差別、親や教員などの指示。つまり、本人が納得できない、他者の価値観によるものが大きい。

近年、将来のビジョンを描かずに成長する若者が多く、ニートやフリーターの増加がそれを物語っている。これを改善しようと取り組みはなされているものの、なかなか向上しない。それは、すでに「自分の未来を考える」という事について、諦めてしまっているからだだろう。このような状態になる前。つまり、幼い頃から常に自分の将来を自分自身で考えられる環境や思考が必要だ。現在、高校だけでなく、小中学校でも児童・生徒に人生設計を行う時間は設けられている。しかし、考え方を教えても、一人一人違うものなのだから、正しい人生などあるはずがない。それより、個人を取り巻く環境が人生設計に重要だと考える。

日本には、いわゆる“ものまね”という教育方式がある。キャリアプランも同様で、働いている人を見て、目標にする。私の知人を例にあげると、幼い頃見た物語の警察官に憧れを抱く者や、教師に影響を受け、目指す者などがいた。

また、親や教員の助言による影響も大きい。この助言をプラスと見れば、悔いを感じる事は少ないが、マイナス。つまり、押し付けと捉えた場合、個人にとって有益とは言えない。押し付けられれば、自分で考える必要はない。または、考えても向く方向は一緒だと思い込んでしまう。私もその1人であり、それが、自分の“将来”というスタートラインを曖昧にしてしまった。

このスタートラインを明確にするために、村上龍著の『13歳のハローワーク』のような、子どもに目標や道筋の見本を提示し、将来をイメージする手がかりにした。実際の仕事人を見なくても、様々な仕事を知る事ができ、自分の将来を決める材料となる。

このような事から、私は将来の自己実現に重要なのは、個人を取り巻く環境と、見本となるものであると考えた。そのため、子どもを取り巻く、“大人”の改善が大きな課題である。私もこれから社会人として、技術者として、さらに大人として、子ども達に影響を与える1人となる。いや、もうその1人になっていると考えてもおかしくない。「どこで、誰が自分を見ているかわからない」ように、いつ自分の目標を探している個人に出会うかわからないのだから。この世界の人間の見本として、人間1人1人が、常に自分の振る舞いを意識する必要があると考える。

これから技術者となる者として、私は今から出来る事はないかと考え、子ども達に科学の感動、ものづくりの楽しさを伝えるボランティア活動を発足させ、先頭に立ち、活動している。この時、私も、常に子ども達の憧れとなれるよう、心がけるとともに、多くの人と接し、科学を通じて、皆に自分の夢を見つけて欲しいと考える。さらに、科学に興味を持ち、技術者としての夢も考えて欲しいと密かに願う。このような、他者に影響を与える事が、私のスタートラインなのかもしれないと考えながら、まだ、私は、自分自身のスタートラインを探している。

私は、“夢のない”世界ではなく、“夢の持てる”世界を望みたい。夢の実現への道は、生まれた時から死ぬまで続き、終わりが無いからこそ、ひとりひとり、自分が自信を持って歩める道を見つけ、スタートを切り、走り続けて欲しいと、私は考える。